

高温・少雨に係る農作物等の被害防止に向けた技術対策

令和8年(2026年)8月10日
山 口 県 農 林 水 産 部

1 共通事項

本年は猛暑日が続き、8月6日福岡管区気象台発表の「向こう1か月気象予報」においても、暖かい空気に覆われやすいため気温の高い状態が続くと予想され、引き続き農作物等の管理に対する高温の注意が必要です。

また、高温、少雨条件による農作物等の被害を防ぎ、発生しやすくなる病害虫の防除を徹底するとともに、暑熱環境下での作業は熱中症対策が不可欠です。

2 水 稲

登熟期の高温は、白未熟粒の発生による品質低下などの被害に繋がります。また、生育過程において、用水の必要程度が異なります。以上のことから水稻の生育状況に応じた水管理の徹底が必要です。

併せて、病害虫の発生状況に注意し、必要に応じて防除を行いましょう。

区 分		対策内容
共通	栽培管理	○用水の確保・漏水防止対策（特に、用水が不足しやすい地域） ・用水路及びほ場周辺の点検を行い、水漏れを防止する。 ・揚水ポンプを点検する。 ・作溝を行う等円滑な給水ができるように努める。 ・用水の不足が懸念される場合は、穂ばらみ期～穂揃期を中心に重点的にかん水を行う。 ○出穂前後20日間の湛水管理を徹底する。 ○収穫前の早期落水防止等の水管理を徹底する。 ○高温によって収穫適期が通常より早まる可能性があるため、刈り遅れとならないよう、ほ場毎の収穫適期を判定する。
	病害虫	○トビイロウンカ ・防除の目安は、8月中旬以降、株あたり成幼虫5頭以上。 ・防除適期は第2世代幼虫期である8月15日～22日頃と予測される（病害虫発生予察技術資料第4号参照）。 ○斑点米カメムシ類 ・穂揃期と穂揃期7日後の2回防除を行う。なお、「イネカメムシ」の発生が多い地域では、出穂期と出穂7日後の防除を徹底する（農作物病害虫発生予報8月参照）。 ・出穂後の草刈りは、カメムシ類の水稻への移動を促し、加害を助長するので避ける。 ○コブノメイガ ・葉色の濃いイネに好んで飛来するため多肥を避ける。 ・成虫の払い調査で5頭/m²以上であれば、若齢幼虫期に防除を行う（農作物病害虫発生予報8月参照）。

3 大 豆

開花期から着莢期の土壌水分不足は、落花・落莢による着莢数の減少及び同化作用の著しい低下を招くので、状況に応じた畝間かん水を行うとともに、円滑な給水・排水ができるように以下の対策を実施します。

区 分		対策内容
共通	栽培管理	○ほ場への円滑な入排水対策を行う。 ・用水路や揚水ポンプを点検する。 ・畝溝の連結やほ場入排水口の点検・整備を行う。 ・中耕などの作業後は、既存の溝がつぶれている場合もあるので、再度連結する。 ○畝間かん水の実施 ・開花期の水分不足は、稔実莢数減少の原因となるため、7日以上降雨がない場合には畝間かん水を行う。 ・葉が巻いて白く見え始める前に、早めに畝間かん水を行う。 ・畝間かん水は、地温の下がる夕方から早朝にかけて行う（朝方には落水し、日中に滞水しないように注意する）。
	病虫害	○吸汁性カメムシ類 ・カメムシ類の発生状況を確認し、開花30日後と開花45日後の防除を徹底する。なお、開花期は、品種や生育状況によって異なるため、ほ場毎に確認する。また、薬剤散布後にも発生が認められる場合は、追加防除を実施する。 ○ハスモンヨトウ ・発生予察情報に注意し、若齢幼虫期の防除を徹底する。

4 野 菜

果菜類のナス、トマト、キュウリ等は、生育適温を超えているため、草勢の低下による着果不良、着色不良等による品質低下、高温乾燥による生理障害等が発生しやすくなっているので、注意が必要です。

これから育苗や植付けが始まるキャベツ、ハクサイ等は、育苗時の発芽不良や定植時の活着不良等に注意が必要です。

高温・少雨は、チョウ目、アザミウマ類、アブラムシ類等害虫の多発生を助長するため、害虫防除を徹底しましょう。また、用水不足が懸念されるので事前の対策（用水の確保、効率的な利用等）を行いましょう。

区 分		対策内容
共通	栽培管理	○かん水施設等の整備による用水確保と適期かん水の実施 ・果菜類は、随時積極的なかん水を行う。 ・葉・根菜類は、播種期、移植期及び葉数増加期に重点的にかん水を行う。 特に移植から活着までは、畝間かん水等を必ず行う。 ・畝間かん水を行う場合は、滞水しないように注意するとともに、湛水する場合は夕方から早朝の涼しい時間帯に実施し、早朝には水を抜くようにする。

		○敷きワラ等のマルチ被覆を厚めにし、地温の上昇と乾燥を防ぐ。 ○収穫は品質確保のため気温の低い早朝に行う。 ○ハウスは、遮光・遮熱資材による被覆を行うとともに、妻面等開放できるところは出来るだけ開放し、換気を行う。
	病虫害	○病虫害の発生に注意し、適期防除を徹底する。 ○薬剤散布は、日中の高温時を避け早朝または夕方に実施する。 ○太陽熱消毒は、土壌水分が少ないと効果が低下するため、水の確保が困難な場合は、処理期間を長くする、または土壌燻蒸剤との併用について検討する。
イチゴ	栽培管理	○古葉、病葉等を適宜かぎとり、株の生育を促す。 ○育苗ほ場を遮熱・遮光資材で被覆する。 ○親株やポット苗へのかん水量が不足しないよう、株の状態を見ながら朝から午後にかけては回数を増やし、乾燥しないように管理する。
	病虫害	○炭疽病、ハダニ類等の防除を徹底する。
トマト	栽培管理	○ホルモン処理は、日中の高温時を避け、気温の低い時間帯に行う。 ○草勢維持のため適切なかん水や定期的な追肥を実施するとともに、変形果等を早めに摘果し着果負担を減らす。 ○石灰欠乏症等生理障害の発生に注意し、過乾燥を防ぐため、適切なかん水を行う。 ○雨よけ施設の開口部は全開し、高い位置に換気口を設けて換気を促す。 ○出荷時の過熟果や障害果の混入を防ぐ。
	病虫害	○タバコガ、ヨトウムシ類等の適期防除を徹底する。
ナス・ピーマン	栽培管理	○草勢維持のため、くず果の早期摘果やL、M中心の若もぎを行い、着果負担を減らす。また収穫は早朝に行い、品質低下を防ぐ。 ○徒長枝や込み合った株元の側枝をせん定する。 ○古葉や混みあった箇所葉の除去を行う。
	病虫害	○アザミウマ類、ハダニ類、チャノホコリダニやタバコガ、ヨトウムシ類等の適期防除を徹底する。
ホウレンソウ	栽培管理	○遮熱・遮光資材で被覆し、高温による発芽むらを防ぐ。 ○耕うん前及び播種後に十分なかん水を行う。
	病虫害	○アブラムシ類、ハダニ類等の適期防除を徹底する。 ○苗立枯病、萎凋病等の防除を行う。
アスパラガス	栽培管理	○雨よけ施設の開口部は全開し、高い位置に換気口を設けて換気を促す。 ○気温が低下するまでは、遮熱・遮光資材で被覆する。 ○滞水しない程度に、適宜十分なかん水を行う。
	病虫害	○斑点性病害、アザミウマ類の適期防除を徹底する。

秋冬野菜	栽培管理	○育苗管理 ・発芽不良防止のため冷暗所で発芽させ、発芽後直ちに苗床に移動する。 ・苗床は遮光する。 ・育苗後期の液肥を控え、乾燥に強い苗づくりをするとともに定植作業の遅れに備える。 ・予備苗を確保する。 ○ほ場準備、播種及び定植 ・深耕及び堆肥施用により保水力を向上させる。 ・今後の播種は発芽不良も想定されるので、種子の確保、作型の変更等も検討しておく。 ・播種及び定植時の用水を確保し、植え穴灌水、畝間灌水、局所灌水を行う。 ・畝間灌水を行う場合は、滞水しないように注意する。湛水する場合は、夕方から早朝にかけての涼しい時間帯に実施し、早朝には水を抜くようにする。 ・定植作業は曇天時や夕方涼しい時間帯に行い、苗は根鉢までしっかり深く植えるようにする。（浅植えにならないように）
	病虫害	○コナガ、ハスモンヨトウ、ハイマダラノメイガ、アブラムシ類等の適期防除（苗かん注処理または移植後茎葉処理）を徹底する。

5 花 き

高温と乾燥により、葉やけ、奇形花、短茎化等の品質低下や出荷本数の減少が想定されるので、遮光や換気等による高温対策や、かん水等による土壌水分保持に努めましょう。

高温・少雨は、チョウ目、アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類等害虫の多発生を助長するため、害虫防除を徹底しましょう。また、用水不足が懸念されるので事前に対策（用水の確保・効率的な利用等）を行いましょう。

区 分		対策内容
共通	栽培管理	○かん水設備等の整備による用水の確保と適期かん水に努める。 ・定植直後から生育初期は特にしっかりとかん水する。 ・畝間かん水は、地温が下がる夕方から早朝にかけて行うこととし、ほ場内に滞水しないよう排水対策を実施しておく。 ○遮光・遮熱資材による被覆により高温対策を実施する。 ○ハウスでは、可能な範囲でサイドや妻面を開放するとともに、換気扇や循環扇等を活用して換気、通気に努める。 ○収穫は品温・気温が低い早朝に行う。 ○敷き藁やマルチ資材などを活用し、地温上昇を防ぐ。
	病虫害	○病虫害の発生に注意し、適期に防除する。 ○薬剤散布は日中の高温時を避けて早朝または夕方に実施する。

		○ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、チョウ目（ヨトウムシ類、タバコガ、ハイマダラノメイガなど）、カメムシ類等の害虫防除を行う。
露地栽培 キク リンドウ	栽培管理	○整枝、下葉かぎにより通気を確保する。 ○土壌水分が不足している場合は、適宜灌水（畝間かん水など）を実施する。畝間かん水は、地温が下がる夕方から早朝にかけて行うこととし、ほ場内に滞水しないよう留意する。 ○10月咲きキクでは、柳芽の症状が激しいものは側芽への仕立て替えを行う。 ○リンドウは、可能な範囲で遮光資材を展張して収穫枝の高温障害や株枯れの発生を防止する。
	病虫害	○ハダニ類、アザミウマ類、チョウ目の防除を行う。
施設栽培 カーネーション キク・ユリ トルコギキョウ等	栽培管理	○マルチ資材等で被覆し、地温の低下と土壌水分の保持に努める。 ○遮光・遮熱資材で被覆する。 ○可能な範囲でサイドや妻面を開放するとともに、換気扇や循環扇等を活用し、積極的な換気、通気に努める。 ○定植前から遮光を展張して地温の低下を図るとともに、定植作業は夕方に行って、十分なかん水により活着を促す。
	病虫害	○ハダニ類、アザミウマ類、コナジラミ類、チョウ目等の防除を行う。
養液栽培 バラ ガーベラ	栽培管理	○用水が不足する施設では、渇水に備え、早めに用水を確保しておく。 ○遮光・遮熱資材で被覆する。 ○可能な範囲でサイドを開放するとともに、換気扇や循環扇等の活用により、換気、通気に努める。 ○草勢の維持と通気確保のため、古葉や不要な枝葉の除去を行う。 ○自動防除機を装備しているハウスでは、用水が十分確保されていれば、防除機を利用した細霧冷房を行う。
	病虫害	○ハダニ類、アザミウマ類、コナジラミ類の防除を行う。

6 果 樹

カンキツでは、高温・乾燥の影響で葉巻、落葉の発生などにより、樹体の衰弱や果実肥大の抑制、着色不良、陽光部位の日焼けによる果実品質の低下に注意が必要です。

ナシ、カキ等では、果実肥大の抑制、ブドウでは着色不良、果実軟化、脱粒の発生等による果実品質の低下に注意が必要です。

また、高温・少雨は、チョウ目、サビダニ類、アザミウマ類等の多発生を助長するため害虫防除を徹底します。今後、用水不足が懸念される場合は、用水の確保や効率的な利用等の対策を事前に行いましょう。

区 分		対策内容
共通	栽培管理	○園内の除草や敷きわら等によるマルチを行い、土壌水分の保持、地温上昇の抑制に努める。 ○用水の確保が困難な場合は、たこつぼかん水等の局所かん水を行う。 ○幼木園、南西向き傾斜地、耕土の浅い所では、かん水間隔を短くする。
	病虫害	○病虫害の発生に注意し、適期に防除する。 ○薬剤散布は、日中の高温時を避け、早朝または夕方に行う。
カンキツ	栽培管理	○ウンシュウミカンは、昼間に葉が巻く状態となったら、かん水を開始する。「せとみ」などの中晩柑は、無降雨日が7～10日続いたら、かん水を開始する。 ・かん水量は1樹当たり50～100リットルとし、樹冠下にかん水する。灌注器によるかん水も有効である。 ・樹別交互結実栽培の遊休樹には、夏枝の発生を促すため、必ずかん水を行う。 ・省力化や少量かん水が可能な点滴チューブを導入する。 ○着果過多樹では、樹勢の低下や小玉果を防ぐため、早期に摘果を行う。 ○果実の日焼けを軽減するため、外成りの果実を摘果し、葉裏の果実を残す表層摘果を行う。 ○極早生・早生ウンシュウ、「石地」、「せとか」では、日焼け果を軽減するため、炭酸カルシウム剤を散布する。 ○落葉が著しい樹では、枯れ込み防止のため樹幹に白塗剤を塗布する。
	病虫害	○ミカンハダニ、ミカンサビダニの防除を行う。
ナシ	栽培管理	○無降雨日が7～10日程度続いたら、20～30mm程度のかん水を行う。 ○果実品質を確認し、適期収穫を徹底する。
	病虫害	○ハダニ類の発生に注意し、適期防除を行う。
ブドウ	栽培管理	○無降雨日が7～10日程度続いたら、20～30mm程度のかん水を行う。 ・土壌の急激な乾湿変化による裂果の恐れがある場合は、かん水間隔を短くし、1回当たりのかん水量を減らす。 ○樹勢が弱っている場合は、着果量を見直す。 ○果実軟化、脱粒の発生に注意し、適期収穫を徹底する。
	病虫害	○ハダニ類の発生に注意し、適期防除を行う。
カキ	栽培管理	○無降雨日が7～10日程度続いたら、20～30mm程度のかん水を行う。

7 畜 産

高温は家畜の生産性に影響を与え、乳牛では泌乳量の減少や乳成分の低下、肥育牛や豚等では増体量の低下、鶏では産卵率の低下や死亡等が懸念されるので、暑熱対策に努めましょう。

飼料作物では、高温が続くことで収穫時期が早まる可能性があるため、適切な肥培管理等により良質粗飼料の確保に努めるほか、天候に応じて迅速に作業が行えるよう共同作業等の体制を十分整えましょう。

区 分	対策内容
畜舎・設備	○換気を充分に行うとともに、屋根への遮熱剤塗布、寒冷紗やよしずによる日除けにより環境改善に努める。 ○換気扇や扇風機による畜体等への送風や散水・散霧を行い、家畜の体感温度の低下に努める。 ○自動換気装置等を点検し、稼働を確認するなど、設備の不備による事故を防ぐ。
家 畜	○飼育密度の緩和により、家畜のストレス軽減と体感温度の低減に努める。 ○良質で消化率の高い飼料の給与、ビタミンやミネラルの追給及び清浄で冷たい水の給与に努める。 ○飼槽や給水器の清掃を行い、採食量、飲水量の低下を防ぐ。 ○観察の頻度を増加させることで、健康悪化の兆候がないか等、家畜の健康状態をよく把握し、快適性に配慮した飼養管理に努める。異常が見られた場合は速やかに獣医師の診察を受ける。 ○特に酪農経営においては、夏季における受胎率向上のため、基本的な暑熱対策を講じた上で、獣医師による検診やホルモン剤の利用による発情周期コントロールに努め、この他、受精卵移植の活用も検討する。 ○牛を放牧している場合、飲水量の確認や日陰施設を設置するとともに、牧草の生育を維持するため強度の放牧を控える。
飼料作物	○高温が続くことで収穫時期が早まる可能性があるため、採草する場合は、牧草の生育状況を確認し適期刈取りに努める。 ○草地については、過度の低刈りや短い間隔での刈取りを避け、貯蔵養分の消耗を軽減して、草勢の維持に努める。 ○収穫期が近づいたソルガム類や青刈りトウモロコシ等については、コストに配慮しつつ、気温が低い時間帯でのかん水に努め、かん水が困難ないし回復が困難と見込まれる場合は、早期に収穫を行い、品質の維持・確保に努める。 ○飼料用イネや飼料用米については、主食用水稻に準じた栽培管理に努める。